



FUNABASHI 1997

1997年度  
日本建築学会大会  
(関東)  
関東支部設立50周年記念大会

基本テーマ：

**海・緑そして建築**  
環境と技術のゆくえ

学術講演発表/研究協議会  
/研究懇談会/パネルディスカッション

会期：  
1997年

9月13日(土) 15日(月)

主会場：

日本大学理工学部  
船橋校舎

千葉県船橋市習志野台7-24-1  
(東葉高速鉄道船橋日大前下車)

SYUNKEN

**駿建**

1997.7 Vol.25 No.2 夏期号  
日本大学理工学部 建築学科  
短期大学部 建設学科建築コース



1997年度日本建築学会大会が船橋キャンパスで開催される。会期は9月13～15日。恒例の研究協議会・学術講演会等の研究発表のほかに「海・緑そして建築 環境と技術のゆくえ」を基本テーマとした多彩な催し物が企画されている。建築学会のアクティビティを体験する絶好のチャンス！ 学部生の参加は自由なので、ぜひ大会参加を予定に入れていただきたい。これは、完成したばかりの建築学会大会ポスターのデザインである。

大会ホームページ：

<http://www.aij97.cst.nihon-u.ac.jp>

## 座談会 建築設計教育の目指すもの

教授 齋藤公男  
教授 関沢勝一  
教授 高宮真介  
教授 野村 勲(司会)  
(50音順)

建築教室発行の「卒業設計優秀作品集」が今年で20号を迎えた。そこで、今年の編集担当にあたった野村勲教授を中心とする4年生クラス担任の先生方が企画して、進行：野村教授+数名の先生がたに集合願ひ、「卒業設計をめぐる座談会」を行った。『駿建』編集委員会が入手したこの記録以外にいろいろおもしろい話もあったらしいが、その座談会のごく一部が「卒業設計優秀作品集」に収録されている。しかし、「もと原稿」には「カットするには惜しい話」が多いので、野村教授の了解を得て、『駿建』に許されるスペースの範囲でバージョンアップさせていただくことにした。(編集委員会)

### 卒業設計と卒業研究 何をめざすか

野村 建築教室の卒業設計優秀作品集は、今年第20号を発行することになりました。まず、この20年を振り返っての感想をお聞かせください。

関沢 卒業設計というテーマで話をすると、今、大学で行われているカリキュラム全般の話とどこかでつながってくると思います。

卒業研究と卒業設計についてはどこの大学でも、何のためにやるか、どういう方法でやるかということで論議的になっています。10年ほど前に建築学会の建築教育研究懇談



関沢教授

会が全国の大学155学科から集めたアンケートによりますと、両方をやらなくてはいけないという大学が3割、その他の大学はどちらかの選択でいいということ。われわれの建築学科は、旧制の頃からの伝統で卒業研究と卒業設計の必修は当然という意識で長年やってきました。一時期、短い間ですが選択にしたことがあったのですが、卒業設計を選ぶ学生が10%台に落ちてしまい、やっぱり必修にしなければ……という教師的発想で元に戻ったという大きな流れがあります。

齋藤 私の意識のなかの卒業設計というのは自分の学生時代のときの卒業設計の意味とか、自分がそのときもっていた思いにまでさかのぼってしまっていて、卒業設計はこうあってほしいとか、こういう意義があるというふうに感じてしまうんですね。

私の考えでは卒業設計というのは、4年生の最終段階で何かをまとめて一つの自分の足跡として残すという総集編、けじめというようなものだと思うのです。そういう大きな意味のなかで具体的に何を学生にしろらうかというのは、カリキュラムや時代の動きによって変わって

るということはありませんが、卒業設計という重みは重みとして、それとは別格の意味があるのではないかと考えています。

野村 私も卒業設計には学生時代への感傷旅行のようなものを感じるんですよ。だれにどこで手伝ってもらったとか、そのころどういう音楽がはっていたとかということと一緒に学生時代のよき思い出としてあるのですが、同じことを私が学生に求めつつけていては、逆に学生に負担を感じさせてしまう……という感じがしています。

齋藤 私自身、卒業設計だけは先生にも口を出させない、自分の思いのたけを何でもいいから吐き出させる、それができる唯一の場だと自分が学生のときは思いましたね。そこで思いきりやって、後々の財産になるような燃焼する場面があれば、形はどうあれ一番いいのではないかとありますが、逆にいえば、われわれが燃焼できるような形をうまくつけてあげることなのでしょうね。しかし今は、設計製図の延長としてとらえるような傾向があって……。

関沢 卒業設計というのは、もともと建築を勉強して最終資格がある

よという証明書だったのですね。今でも外国の大学では4年在学したから卒業設計を描いていいとはいいません。先生にそろそろ卒業設計を描いてもいいよといわれて描くもので、これで一人前、建築アーキテクトとしての卒業資格をもらうわけです。ですから、カリキュラムを全部終えて最後の総集編といったもので、それでこそ卒業設計という意味があったのでしょうね。

野村 そういうことからいうと卒業設計というのは建築のいろいろな学科目で勉強している学問を体系づけて総合化していく、その能力があるかどうかということですね。そうだとすると、今の学生の取り組み方とか、われわれの教え方も反省しなければいけませんね。

#### 卒業設計の位置づけ

斎藤 うちの建築学科は、ある意味ではアーキテクトの卵を育てるといって色彩が強くて、どうも卒業設計ということになると、トップグループがめざすべき一種の理想、われわれにとって夢みtainなことで卒業設計をみてしまうのだけど、学生にもいろいろいるわけですね。そういう学生達の集団に対して、3年生まではタテ割りのカリキュラムでやってきて、最後の4年生にきて総合としてまとめの卒業設計をやれといったときに、その一人ひとりの学生にとっての総合、その学生にとっての建築で一番興味のあるテーマでやってもらうというのがいいと思いますね。総合といってもデザインとか、技術、計画もありますから、それらを含めた総合をうまく指導できれば、学生自身も面白いだろうし、もっと卒業設計にバラエティがでてくるのではないかと思います。そうすると、建築では計画がトータルの頭になって引っ張っていくわけだけど、それを支えるいろいろな人た

ちの役割のようなものが意識できて、やりがいが出てくる。でも、そうするためには卒業設計であわててもしょうがないんで、その芽を育てるように設計製図のなかでタネをまいてもらえば、先生方にとっても意識が変わってくるし、学生にとってもそのタネを育てて幅がでてくると思うのですが……。

#### 指導の中で感じることは

野村 それでは、学生を指導していて感じておられることをお聞かせください。

高宮 私が卒業設計を手がけたのは60年安保の頃ですから、ある意味では学生が政治的・社会的に目覚めた頃なんですね。ですから、そういう時代を反映したテーマが多くて、私もアジアに目を向けたようなテーマの卒業設計でした。やはりそのときそのときの時代の風潮がありますから、最近の学生はすぐ、情報ネットワークとか、そういう方向に流れますね。そのようななかで、ちょっと政治的・社会的な視点が欠落しすぎているのではないかと感じています。

野村 でも、福祉のテーマなどは多くなっていますよ。だからといって、私の場合、福祉施設をやれとはいっていません。ただ、どんな建物を設計するにしても、必ずその建築物を高齢者や障害者が使ったときどうだろうかという視点だけ忘れるなどしています。

関沢 今、福祉という一つの分野の話が出ましたが、建築の場合はそれに関わる一つの建築の型、ビルディングタイプというのがあったわけですね。ところが今はビルディングタイプのベースがゆらいでしまって、タイプというものが本当に存在するかという時代ですから、当然施設という用語も問われるという時代です。ですから、これが福祉施設の建



野村教授

築ですということが成立しにくくなってきていますね。そのへんは学生ももううすはわかるんですがいまいちわからない、教える教師のほうもむずかしい。最近、授業としての設計製図もだんだん脱ビルディングタイプになってきて、むしろどういふふうにプログラムを組むかというほうの能力が問われてきていますね。

#### テーマ選定の重要性

野村 学生の卒業設計のテーマの決め方が、安直すぎるというふうに感じませんか。途中でテーマを変えたいといってくる学生がときどきいるんですが、最初と関連性のないテーマを出してくる。これは非常によくないことだと思うのですが……。

関沢 何か一つのテーマと取り組んで、試行錯誤の上で発展的にプログラムが変わるのは非常にいいことなんですけどね。しかし、まったく違ったことをいってくるわけですから、これは本人がよく考えていないと思わざるをえないですね。

野村 ちょっとやってみて、どうもバリアが多すぎるというので戻ってきてしまう。そしてまた、違うものを考える……そういう感じがするので残念だなと思うんです。

斎藤 私は自分の反省の念もこめていいですが、テーマづくりというのは一番面白いし、また一番むずかしいということは事実ですね。3年生までは与えられた料理だけを食べて



高宮教授

きたところに、いきなりこれをクッキングしなさいというわけですから、さてどうしようかと当惑するわけです。そのへんの心づもりとか、素材のこれとこれを組み合わせたら面白いものができそうだとか、そういったことを最初にわれわれを含めて学生とディスカッションできるといいだろうと思うんです。今、卒業研究でグルーピングするときに学生とフリーディスカッションをしています。意外な方法や新しい取り組みがみつかって、われわれにとっても学生にとっても有効です。ですから、このような方法を卒業設計のときにもやって、3年生の終わりごろから方向付けができればいいのだけれど……。たぶんやり始めて考えだすと、ほか面白くなってテーマが変わってしまうこともあると思うんです。方向付けのところ、時間と先生との対話があるとずいぶん違うと思いますね。

野村 私の研究室はどちらかというところから、卒業研究のゼミは毎週やりますけど、卒業設計は自分たちでよくテーマを考えて、聞きたいことがあったら聞きに来るよといっています。もちろん取り組みの姿勢は話しますが、それ以上突っ込まないところに問題があるかもしれませんね。

高宮 私もテーマを決めることが一番大事な勉強だと思っています。学生が自分で問題意識をもったうえで自分のテーマを設定することが大事

で、テーマを変えることによって成長するなら非常にいいことだと思うんです。私の研究室はどちらかというところから、卒業研究と卒業設計はできるだけペアでやりなさいと奨励しています。学生は試行錯誤しながら伸びていきますから、そのプロセスが彼らにとって非常に大事だと思っています。

### これからの卒業設計

関沢 話題を変えますが、卒業設計をやるかやらないかという議論は非常に多く、卒業研究について同様の議論はゼロであるということが、最初にお話したアンケート結果にも出ています。わが建築学科はよくいえば伝統的、悪くいうと保守的で、こういうところに一番よく特徴がでますね。先生方のミーティングでも両方やったほうが良いという先生は計画設計に少なく、構造の先生に多い。建築学科に入学したのだから、図面を描けなくともいいから読めなくては行けないという説明なんですね。これに関しては、必修で続けるにしても、その性格をもう一度よく考えて決めなければいけないだろうと思っています。

斎藤 図面を読むのは、できれば設計製図で読めるようにしてもらえばいいのではないですか。

関沢 読むというのは、社会に出て自分がデザインして設計しなくても、現場へ行って施工するときもちろんと図面が読めなければだめだというのが論法だったと記憶しています。

野村 このことについては、関沢先生のほうで新カリキュラムに反映させる方向をお考えのようですから……。

関沢 この件については、私は何度もいっているのだけれど、在来タイプの設計製図の延長のような卒業設計をやるにしても、時代が動いてい

るし、うちの場合は学年300人という多人数教育をやっていますから、そういう意味で教育の無理があると思うのです。ですから、日本の建築教育の特色である二面性、建築は芸術であるということと、科学・工学的技術であるという二面性をお互いに理解して両方の特色をもたせるといいと思いますね。

今は建築学会もそうだけど、とくにうちの建築学科は物事を考えるのに構造と計画というふう非常に割り切って考えやすいけど、私はパイを二つに割るような方法はないと思うのですよ。もっとパイをタテではなくて、ヨコに切るような横断的なことが必要で、また世の中がそれを要求しているということじゃないでしょうか。そういう考え方がだんだんうまく浸透してくると、自然に卒業設計の中味も変わってくるのではないかと、今は中味はそのままにして、皮だけが卒業設計というもので、どうしようかと先生方が非常に苦労されているわけで、なかなか成果が上がりにくいのはそこにあるんじゃないかと私は思いますね。

野村 そういう意味では、設計という言葉にとらわれている部分があると思いますね。

関沢 もちろん、ほとんどそれにとらわれているんですよ。

### 学生諸君に望みたいことは

野村 では、このへんで学生さんの卒業設計に対する取り組み方、進め方について望んでおきたいことを……。

斎藤 3年生から4年生にかけての時期は、大学生としての自覚とか建築を生み出すための非常に貴重な1年だし、学生もそれに応えて伸びようとしているときですね。この大事な時期にある時間をかけてわれわれもやらせようとしているし、学生もやるようとしている。この時間の中味

を本当にやってよかった、やらせてよかったということにしないといけないと思うんです。ところが、学生のなかにはやっと設計製図から逃れたのにまた図面を描かなきゃいけない……と泣いている学生もいるわけです。しかし、このような学生に研究をやらせたり、実験をやらせたり、模型をつくらせたりすると、本当に嬉々として馬力を発揮してやるわけです。ということは、だれでも本来自分のやりたいこと、面白いと感じることをもっているわけで、これをもたせること、その学生にとって何が一番いいかということを考えてやるのがわれわれの役割だと思えます。そのためには卒業設計というタイトルだけで学生が萎縮しながらやるのではなく、その中にもいろいろな可能性があって、こういうことも評価されるんだとか、建築を通じて自分もこういうことに参加できるんだという、自分が社会に出ていくための自信というか、そういうものに何かプラス がつけばいいという、そういう卒業設計の枠をわれわれが定義づけて提示してやる必要があるのではないかと。そうすれば卒業設計で、建築デザインをめざす人とそのほかをめざす人とお互いに呼応しながら建築全体の枠が広がって、それぞれがターゲットをもつことができる。これが、われわれに課せられた課題ではないかと思えます。

このようなことを論ずることは、逆にわれわれがどういう姿勢で指導するかという試行点検みたいになるわけだけど、そこにはね返ってきて初めて卒業設計というのが学生も一生懸命時間をかけるし、われわれもそれに向かって時間をかけるという、そのトータルな意味の目標になるような気がするんです。

高宮 思い返してみても卒業設計でやったことがある意味で一生ひきずるんですね。大きくいえば、一番大事

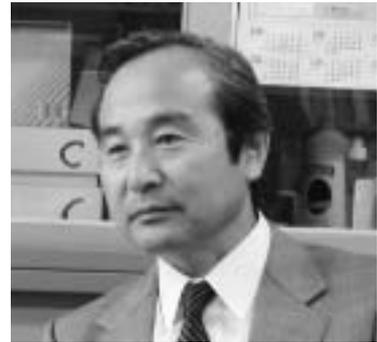
な3年から4年の時期に、そこで考えたこと、自分の世界観、自分の社会に対するコミットメント、自分の立場、そういうことをキチッとわきまえて、その時代の世界を自分の卒業設計につきこむということですね。それが一生ひきずるようなテーマであれば、すごい幸せだなという気がしますね。

ぜひ学生のほうも教えるほうも、そういうテーマの選び方をしてほしいと思っています。とくに設計を志望する人には強く望みたいですね。関沢 私も皆さんと同じような考えをもっていますが、最近の学生の傾向をみていると、研究というようなまとめ方をしなくても、自分の勉強として身に付けておけば十分ではないかというテーマはたくさんもってくるんですね。ですから、研究というのは記録として残るのだから、こういうテーマはどうですかというようなサジェスションをしています。

私は、研究と設計とは脳みその別のところを使うと俗にいいですが、研究は研究、設計は設計と考えています。ただ、設計の場合、何のテーマをやるか、それをよく考えてやりなさいといっています。

私の研究室では今までに教会の設計に取り組んだ学生が3人ありますが、いずれも優秀でした。それはテーマを選んだ学生がクリスチャンであったりして子供のときから宗教的体験があり、それを建築家として自分で反映しようとするときにしっかりしたプログラムを自分で組めるからだろうと思います。ですから、学生にはそういう意味で俗な言葉ですが自分の持ち味を生かしてやるようにと、その一言で尽きるような気がします。先生はその持ち味をよく噛みしめてやれと、先生の持ち味でやるのではなくて、学生の持ち味でやって、先生はそれを味わってみなさいということですね。

野村 私の研究室も基本的には卒業



齋藤教授

研究のテーマは自由で、自分の関心のあることをやりなさいといって、そのためにゼミを毎週やっているんですが、自分で研究テーマをさがすという学生はほんの一部です。あとは研究室でこういう研究が考えられるよというところにだんだん寄ってくるような状況ですが、これはある意味ではしょうがないのかなと思っています。ただ卒業設計はできるだけ自由にやりたいと思って、何の強制もしないで指導しています。

それはそれとして、私は4年生の夏休みの終わった頃、3年までの生活と変わったかいと学生に必ず聞きます。そうするとみんな変わったというんですね。3年生までは先生と学生という垣根があって、なかなかそれを越えられないのですが、4年生になると人間と人間のぶつかりあいのなかで先生の考え方に触れて、研究室にくるとということが彼らにとって大きな刺激になるんですね。そして先生の新しい面を発見したりして、それが学生にとってはとても嬉しいことなんです。そういう意味で、卒業研究だけでなく卒業設計も、そういう先生との触れあいのなかで取り組んでいきたいという気持ちがありますね。なかなかむずかしいことなんだけど、3年になったらオブザーバーで4年のゼミに参加できるようなやり方を考えるというのも一つの方法かもしれませんね。

では、このへんで……。お忙しいところありがとうございました。

# 追悼の辞

教授 本岡順二郎



名誉教授加藤渉先生は平成9年6月12日、81年の生涯を閉じられた。

先生は大正4年に駿河台校舎傍の神田淡路町1丁目観音坂下で生誕された。義兄の小野薫東大教授(日本の構造工学の祖の一人、日大専門部と大学院で教鞭を取られた)の強い影響により日大建築学科に進まれた。卒業後は満州国大陸科学院、現地召集、陸軍造船中隊でのコンクリート船(改D25型5000t)の設計、敗戦後の2カ年の辛酸の後、昭和22年に帰国され、助教授として理工学部にて奉職された。当時の建築学科教授陣は初代学部長佐野利器先生の流れを受けて東大系であったが、徐々に齋藤謙次先生を中心に本学出身者が建築学科の教育を担うようになった。理工学部長齋藤先生が急逝されてからは加藤渉先生が学科のリーダーとして主任の12年間、学部のリーダーとして学部長の12年間を活躍された。

先生はその先見性、決断力、実行力から諸大学に先立つ多くの仕事をされた。海洋建築工学科の設立、社会人の大学院受入れ、企画経営コースと不動産科学専攻の設置の外、3000t大型構造物試験機に代表される大型研究設備の整備、クウェート大学および西安冶金建筑学院(現西安建筑科技大学)との学術交流の締結などは先生がなされた仕事の一端である。

研究の面では、前期は土質力学とシェルの研究であり、日本初のスパン40m球形シェル鶴見倉庫(昭和25年)に始まる多くの実施例がある。後期は

海洋工学に関する一連の研究があり、後に建築学会大賞を受賞されている。

先生の古稀を記念して「渉」が出版されているが、この中で先生の身近な人々40名が敬愛する先生を語っている。ロマンチストで、豪放磊落で、優しく、人使いが荒くて、信仰深くて、歌が下手で、走り続けた先生は、私達の心に生き続けることでしょう。

同書冒頭に先生が書かれた「天翔ける！ わが夢」の一節を再録して、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

「後についてくる若者達よ！ 海へ かぎりなき宇宙へ それぞれの夢をのせて翔んで翔べ!! 翔べ!!

若者達よ！ いつの日にも我れここに在り、見守り支えつつ、世のため人のためと、希望と情熱を失うことなく、翔んで翔んで！ 翔んでゆけ!!

天翔けるわが夢に祝福あれ!!

そしてこの世で私の最も苦手の「愛」に己を捧げ、己に挑戦しつつ、二十一世紀にむけて神と共に勇ましく進軍ラッパを吹き鳴してゆこう!!」

## 加藤 渉先生略歴

大正4年8月15日生

### [学歴]

昭和12年3月 日本大学予科卒業  
昭和15年3月 日本大学工学部建築学科卒業  
昭和32年11月 工学博士(日本大学)  
昭和48年3月 名誉工学博士(大韓民国漢陽大学)  
昭和60年9月 日本大学名誉教授

### [職歴]

昭和15年4月 満州国新京特別市大陸科学院研究士  
昭和22年8月 日本大学工学部(現理工学部)助教授  
昭和33年3月 日本大学理工学部教授  
昭和36年4月 建築学科教室主任(12カ年)  
昭和46年12月 理工学部次長  
昭和48年7月 理工学部長(4期12カ年)  
昭和49年4月 日本大学理事  
昭和54年3月 日本大学副総長  
平成4年1月 日本大学顧問

### [学会等]

日本建築学会副会長、科学技術庁海洋開発審議会専門委員、日本学術会議会員(第11期)、土質工学会会長、国連ユネスコIOC諮問機関ECOR日本委員会委員長、同日本代表国際会議理事、国連ユネスコ国際海洋工学教育トレーニング会議極東代表、日本工業教育協会・日本科学協会・日本不動産学会・米国パシフィックコングレスインターナショナル各理事、日本建築学会・日本鋼構造協会・土質工学会各名誉会員、その他

### [受賞等]

昭和35年5月 日本建築学会賞(シェルに関する一連の研究)  
昭和54年10月 土質工学会功労賞  
昭和63年11月 勲3等旭日中綬章受章  
平成3年5月 日本建築学会大賞(建築学の海洋工学への参加活動における長年の多大な功績)

## 中国と日本の合作本の出版 『建築外環境設計』

宇杉和夫



多摩ニュータウンにて

去年の10月に入って、西安建築科技大学の劉永徳先生から書籍小包を戴いた。それが去年の正月の年賀状に書かれていた、中国で出版された本であることは包みを見てすぐに理解できた。

劉永徳教授は1992年に第三回の学術交流研究員として本学に1ヵ月間滞在された。先生の専門は建築環境芸術及び設計で、当時の西安建築冶金学院（現西安建築科技大学）環境芸術研究所所長だった。日本での研究テーマは「歩行空間と広場空間」「都市景観・環境及び点景」で、1992年10月20日から1ヵ月の滞在の間、精力的に首都圏の住宅地開発、市街地再開発、新都心整備、公園整備などの事例を見てまわった。その殆どを私がお案内したが、中国で日本の建築雑誌などを見て勉強してきており、現地を見ての理解がとて早かったように記憶している。単に現地を見学して、担当の行政の方々のお話しを伺うだけでなく、分厚い事業誌にも興味を示され、その資料を中国に段ボール箱で郵送するのに苦労した。

私の研究のテーマが重なっていたので大いに交流させて戴き、重要な施設を多く見学することにしたが、この途中で中国での建築外部空間のデザインの本の出版の話をお聞きし、共著のお誘いを受けた。

また劉先生は、本大学で話す講義についても綿密なノートを作ってこられた。それが未報告未発表のノートであることは、その手書きの書き込み具合から理解できた。講義は大学院生を中心として「中国建築の序列空間・象徴的意義」「中国人の環境観・自然観・建築観」のテーマで行われた。それを拝見して大変几帳面に演繹的に概念を整理されていることを知り、「中国建築の序列空間」を作っているのは中国の方々の意識がそうさせていることを納得した。その原稿も実は新しい本のために用意されていたものであることは、そのあと1994年に私が海外派遣の途中で西安の西安建築科技大学に立ち寄り、出版の打ち合わせをした時に理解できた。劉先生は帰国後も日本の資料を多く希望し、共著出版の協力の件を重ねて依頼されてきたので、訪中する以前に、収集した資料・写真と「日本の広場空間」と題した私の原稿をお送りしてあった。

その間、劉先生と同じ年度の2月に西安建築科技大学にやはり学術交流の交換研究員として訪問された本学海洋建築工学科の川西利昌先生とも共著出版の話を進められ、筑波大学の三村翰弘教授と併せて4名でまとめることと、その中で三村先生は主に欧米の事例を担当されるとの通知があった。

この本の出版計画が、実は劉先生の長い構想の結果であって、劉先生の本学での講演の原稿はその中枢部分にあたることは、後で私が出版の打ち合わせに西安に訪問した際に、その先生がお持ちになった原稿の量とその内容によって知った。その時、劉先生から原稿を中国語に翻訳するにあたって、共著の方々の中で重複するところは劉先生の方で編集し直したいとの希望が出された。したがって、この本は4名の共著でもありますが、劉先生の編集に基づくもので、先生の体系だった構成に基づいている。私の原稿も、考え方の部分と事例の部分の二部構成であったが、前者についてはお互いに理解しあうには時間が必要で、後半の事例の紹介が主になった。異なる文化の共同研究は、その基盤をつくることに相応の交流過程が必要であることがよく理解できた。

『建築外環境設計』は中国の建築関係の出版社では全国的に最も大きい（殆ど唯一）中国建築工業出版社からA4判439ページ、多数のカラー写真入りで、昨年6月出版された。私が見てきた中国の本にはこの種のもので少ないので、現在では貴重な日本の情報源になると考えられ、また劉先生のお考えがよく理解できるものとなっている。その内容は次のように構成されている。

- 第一章 建築外環境設計総述
- 第二章 空間、行為、行為場所
- 第三章 群体空間組合
- 第四章 城市中心区的環境設計
- 第五章 城市歩行環境
- 第六章 街道空間
- 第七章 広場空間
- 第八章 庭園空間
- 第九章 環境組景
- 第十章 水体与建築
- 第十一章 環境的雕塑芸術



理工学部は1987年より西安建築科技大学と「教育・技術の学術交流に関する覚書」を結んでいる。これまで第一回の半貫敏夫先生以来、多くの建築学科・海洋建築工学科の先生方がこの締結に基づき西安を訪れ交流を重ねてきており、現在まで、学術交流・共同研究の方法が模索されてきた。この本は劉先生のご労作によるものだが、この両校の共同研究の最初で唯一の成果という意味でも貴重な価値がある。

（中国の教育・研究機関との学術交流に関する検討委員会委員）



## 自由に考えること

曾我部 昌史

筆者(左)と写真家の平賀氏

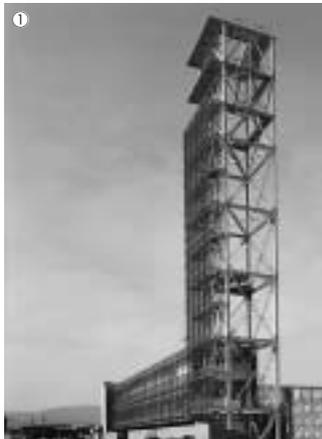
料理好きの建築家というのが随分多いようです。それも、自分で適当にアレンジしてつくっちゃうという人ばかりです。モノをつくるってことでの共通性であれば、洋服をつくるのでも音楽をつくるのでもよいわけですが、料理と建築の間には単に「つくる」ということ以上の大きな共通点があるらしく、料理だけは別格のようです。なぜだろうと思って少し考えてみました。

ごはんをつくる時には、素材や食べる人や気候や調理の道具とかいろいろのことを考えます。例えばサンマを前にして、今日は暑いからビールに合うものになりたいとか、冷蔵庫にだいこんはないけど梅干しがあったとか、今夜は学生の人達がたくさん集まっているなあとか、いろんなことを同時に考えるわけです。いろんなことに思いを巡らせながら、「このサンマをどうしようか」と考えるプロセスが楽しいのですが、重要なのはここで僕たちは「自由」に発想してよいと自覚していることです。ここでいう自由とは何をやってもいいということではなくて、ある目的(この例ではサンマを調理する)に対して、どんなことができるのかの可能性を見極めることなのです。奇抜だからといってサンマにブルーベリージャムをつけてみても、きっとおいしくありません。そういうのは自由じゃないわけです。何ができるのかを正確に把握するプロセスを楽しめるのが自由ということで、建築と料理の共通点はこの「考えることの自由」にあるようです。

建築を考えたときにも、僕たちは自由に考えなければなりません。当然のことながら、この場合の自由というものも何をやってもいいということではありません。形式化した枠組み(こういう機能の建物であればこういう建物にするのが普通であるというような、時に常識とかいわれるようなこと)にとらわれずに、何が一番求められているのかを、自分なりにかつ冷静に考えられることが自由ということです。そうはいつてもなかなか形式から自由になれないので、まずは形式を否定するところから始めようという場合もあるかもしれませんが、はじめから変なものを作ろうとするのはちょっと自由ではありません。肩肘を張って考えてみても形式化の罫に落ちるだけです。少なくとも課題の設計を考えているときぐらいは、自分が一番いいと感じることを信じてみてはどうでしょうか。本当に「おいしいかもしれない」と感じたら、サンマにブルーベリージャムをつけてみたっていいんです。(非常勤講師 設計製図 , )

### 筆者略歴

曾我部 昌史(そがべ まさし)  
1962年 福岡生まれ  
1986年 東京工業大学建築学科卒業  
1988年 東京工業大学大学院修士課程修了  
1988～94年 伊東豊雄建築設計事務所  
1994年 ソガベアトリエ設立  
1994～95年 東京工業大学建築学科助手  
1995年 みかんぐみ一級建築士事務所共同設立



NHK長野放送会館  
八代ショッピングセンタープロジェクト  
八代の集会所 (写真 とも平賀茂撮影)



## 長く住み続けられる家 ,そして町並みをつくる

大沢 悟郎

21世紀の世界でも類をみないような超高齢化社会をひかえたわが国の住宅問題。このごろ私の事務所も、高齢者にかかわる計画が仕事の大半をしめるようになっていきます。

個人住宅の計画では、土地を新たに手にいれて、家を建てるのがとても難しくなって、親の家を建てかえて二世帯同居の家にするのが多くなっています。

われわれとしては経済的精神的にも自立した関係の同居をすすめるのですが、完全同居型でない二世帯住宅での生活経験は、歴史も浅く、親世帯と子世帯の間でのつきあい方、地域や親類、友人などのつきあい方のルールが確立されていません。そのため、設計に着手する前にさまざまな問題を解決しなければならなかったり、着手してから、方針を決定するのに手間どるのが現状です。

二世帯住宅の設計ほど、中立な立場でまとめあげる建築家が必要であるといつも感じています。

\*

私も、数年前から自邸を祖母から住む三世代の家に造りかえて住んでいます。この建物は、やはり建築家であった父が40年以上前に建てた家を、当時から『成長する家』と称して、今回までに何度かの増改築をくりかえしてきたものです。このたびの増改築も、この家のシンボルでもある居間を残して新たな空間づくりをしました。庭の木々も年月とともに大きくなっていましたが、すべて残して計画しました。

この体験で、家というものは、その時代、時代の家族の成長とともに、変化し、その時代の技術や材料によって改装され、大事に家への愛着とともにうけつがれるべきものだということにおおいに気づかされたものでした。長く住み続ける(使い続ける)ことを可能にする設計の努力がたえず必要なでしょう。

\*

街を散歩していると、突然いつもの景色だったまだ十分に使えるような家を取り壊されています。その敷地に、展示場でみられるような大きな建物が建ち、塀ごしにいつも花を楽しみにしていた、こぶしの木が倒されています。

このような街に対するやさしい気持ちをわすれたよう



成長する家  
(自邸)

浮遊した八角形の家

町角の小さなおとう  
ふ屋さん

な家がつぎつぎにあらわれます。普請とは、どんなものであれ環境の均衡を破ることになる変化です。そのことによって、廻りの環境がよりよくなるように配慮する、というあたりまえのことがおこなわれないと感じます。

建築家はもう一度、住まう人、出会う人にとって、建築というものがいかにそれらの人々の心に大きな影響を与えるものだということを、肝に銘じて建物を設計しなければならないと思うのですが。

(非常勤講師 設計製図)

### 筆者略歴

大沢 悟郎 (おおさわ ごろう)

1951年 東京に生まれる  
1974年 東京理科大学工学部建築学科卒業  
1975～84年 三上祐三 + MIDI 総合設計研究所  
1984年 TOS 計画工房を設立  
1996年～ 日本大学短期大学部非常勤講師

著書 「二世帯住宅その前に」(三省堂 1994)、家づくりの図集3「3階建てのつくり方」(彰国社 1996)

## 平成8年度各賞受賞論文・作品概要紹介

齋藤賞

### 有効応力解析のための間隙水圧モデルに関する基礎的研究

エネルギー特性に基づく検討

鴨下順司(東京電力)

指導：榎並 昭教授，安達俊夫助教授

液状化を伴う飽和砂地盤の地震応答解析手法として、間隙水圧の上昇に伴い土の物性を時々刻々と変化させて解析を行う有効応力解析(液状化解析)法がある。この解析手法を用いて液状化の進行過程を詳細に追跡するためには、強震時に地盤内に発生する間隙水圧の挙動に関して、簡便かつ適切な数値モデルが必要となる。しかしながら、現在までに提案されている間隙水圧モデルの多くは詳細な評価を可能とするために、必然的に多数のパラメータを含む複雑なモデルとなっており、現段階において有効応力解析法を実務レベルで利用する際の足枷となっている。

このようなことから本研究は、最近、上部構造の分野では盛んに研究の対象とされているエネルギーの概念を地盤に適用し、比較的単純に間隙水圧を評価する手法・モデルに関して、仮動的実験の応答結果をもとに検討したものである。

本研究の成果として、間隙水圧の評価にエネルギーの概念を用いることの有効性および本研究で提案する間隙水圧モデルの妥当性を確認できた。

齋藤賞

### 諫早湾干拓事業における生態・防災・耕地の総合的な形成を目指した環境デザイン

和田 剛(日建設計)

指導：本杉省三助教授

#### ・設計の主旨

現在、長崎県・諫早湾の報道において、死滅するムツゴロウなどが環境問題として象徴的に取り上げられていますが、本当に重要なのはそれらを支え、かつ人間社会

にも多方面にわたり間接的に恩恵を与えてきた豊かな土壌の存在です。

本計画はこの点に留意した「ビオトープにおける開発」をテーマに、人間社会と自然環境の総合的な形成を目指し、検証を進め、以下の提案を創出したものです。

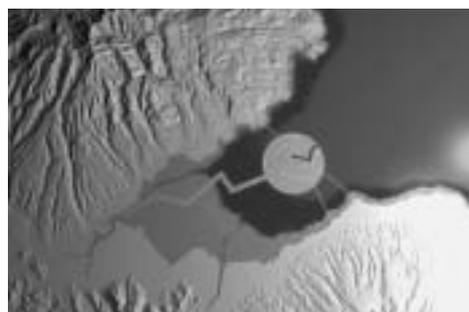
日本が抱える食糧安全保障問題に対しては、『待機農地システム』を提案し、食糧有事に短期間に耕地に転用できる空間を計画する。

地域が必要とする本明川の防災には、機能性を重視した『空の調整池』を提案・計画する。

生態に対しては、その生息域を支える干潟の形成プロセスの保全を目的とした計画許容域を設定する。

以上の機能を総合的に満たす多目的干拓地を、地域とリンクさせた自然環境芸術公園として計画する。

なお、計画の造形および機能を、すべて干拓・水害・史跡・漁業・農業・自然・防災等の地域のコンテキストから引用し、計画地自体を、風土のメディア、消えゆく湾と土地の記憶を後世に伝達するメディアとしました。



駿建賞

### 実歩行時に対応する衝撃シミュレータの開発と住宅床の振動応答特性に関する研究

石井健太郎(竹中工務店)

指導：木村 翔教授，井上勝夫助教授

床は建築と人が接触する唯一の基本部位であることを考慮すると、床構造の諸性能値を妥当な評価方法を用い

で正確に把握し、適切な「住まいの床」としての床構造を居住者に提供していくことは、居住空間における「快適性」を追求していく上でも非常に重要である。しかし、これまで歩行感からみた床の評価方法はいくつか報告され実用化されているが、いずれも歩行時の衝撃力と床の動的物理量との関係については曖昧である。

本研究は、歩行からみた「住宅床」として適正な床断面仕様を検討するため、人の歩行時における衝撃力特性を考慮した衝撃装置を開発し、これを用いて各床構造における振動応答特性の相違について実験的検討を行った。さらに実際の住宅床構造を対象に歩行時からみた床弾性調査を実施して、動的物理量について系統的に検討を行った。

その結果、点衝撃として足裏各部の衝撃力波形を各床に入力した際の動的応答特性を明らかにすることができた。この衝撃シミュレータは実歩行とも対応性がよいことから、非常に有効な装置であると考えられる。そして現状の住宅床は、床構法や仕上げ材の種類により動的ばね定数や変形特性、インピーダンス特性などの振動応答特性が大幅に変化することが明らかになり、改めて床材を居住性能から評価する必要性が示唆された。

駿建賞

### 住宅照明環境が高齢者に与える心理的影響に関する研究

石橋英里子（ポーネルト）

指導：野村 歎教授，八藤後 猛助手

高齢社会が急速に進みつつある現在、高齢者に快適な視環境を提供するための多くの研究がなされている。これらの研究は、高齢者の視認能力に関するものがほとんどであり、高齢者用住宅に関する事例調査でも、照明に対する配慮は少なく、評価が量的な側面に偏りがちである。しかし本来ならば、照明の目的は、明視の要求を満たすためだけではなく、特に住空間においては照明環境における心理的快適性が重要であると考えられる。

本研究は、高齢者に対し実空間で照明環境を種々変化した条件下で感覚評価実験を行い、高齢者にとって快適な照明条件を提案することを目的としている。

実験・解析の結果から、高齢者にとって快適な照明条件とは、「蛍光灯によるベース照明により部屋全体の活動性（明るさ）を確保したうえで、局所照明、意匠照明により 安らぎ（暖かさ）を高める」ことであると考えられる。

本実験においては、若年者と高齢者の明るさ感・グレアの感じ方には差がみられなかったことから、照明環境

に求めるもの両者の違いは、視機能の違いによる影響よりも、光に対するとらえ方、期待感の違いからくるものが大きいのではないかと考えられる。高齢者の照明環境に対する好みの評価、明るさ感は単に照度レベルを上げることにより上昇するものではなく、一定の照度レベルを保ったうえで多灯照明とすることが重要な条件であることが示唆された。

駿建賞

### 学術情報館

日本大学理工学部における研究・教育メディアサービス施設の設計

内田善尚（Zy and Partners）

指導：高宮真介教授，佐藤慎也助手

#### ・設計の概略

近年のコンピュータ応用技術の高度な発達と、それに起因する研究者・教職員、学生の情報ニーズの先鋭化により、大学における学術情報支援サービスは、更に高度な内容を求められている。ここで述べる学術情報とは、大学に所属する研究者・教職員、学生が、研究・教育活動およびその支援活動を行うために必要とする全ての情報を指している。本計画では、日本大学理工学部におけるネットワーク時代の研究・教育メディアサービスのために、あらゆる学術情報に対する収集・蓄積・加工・提



供サービスを一貫して行う学術情報館を提案する。

それは駿河台校舎一号館の改築として計画され、理工学部の顔である旧一号館のファサードを保存・活用し、その外側を取り囲むガラスボックスのなかに、生涯学習機能を取り込んだパブリックなオープンキャンパスとしての機能を配置し、その内側の高層棟に、ネットワーク時代の授業に対応する教室群と、理工学部の頭脳である研究・教育メディアサービスのための施設を配置する。

---

駿構賞

### MJG式ガラス支持ケーブル構造の力学特性と適用性に関する研究

今村柳輔（日本大学大学院）

指導：斎藤公男教授

近年、建築空間の軽量性・透明性を積極的に表現するデザイン潮流を背景として、ケーブル構造がいろいろな建築に利用されるようになってきた。大型壁面の透明性を求めてケーブルをガラス壁面の支持構造として用いる試みもその一例である。本論はこの大型ガラス壁面構法のうちで、ガラスパネルを点支持する Minimum Joint Glazing (MJG) システムとケーブル構造を組み合わせた大壁面構成法に注目して、その構法と設計上の問題点を検討したものである。MJGシステムはガラスに孔を開けずにガラスパネルのコーナーを挟み込んで点支持するユニークな工法で、面内、面外の大きな変形に追従できる特徴をもっている。また、これと組み合わせるケーブル構造については、(1)ガラス支持に適した構造形式と形状制御 (PS量との関係)、(2)ガラス曲面への適用性、(3)その構造特性と許容変形量の設定等、構造計画・構造設計用のデータをガラス支持構造のために整理する必要がある。

本論では、Cable GirderとCable Gridについてガラス支持構造としての構造性能を検討し、構造計画段階で総合的な構造特性を把握するための解析モデルを提案、有限要素法の解析結果と比較してその有用性を確かめた。さらに、ガラスパネルが破損・脱落しないレベルで、ケーブル構造の許容変形量を定める計算法を示した。

---

駿構賞

### 超大型寸法を考慮したRC梁の寸法効果に関する研究

田村真利（西松建設）

指導：白井伸明助教授

本論は、鉄筋コンクリート部材の実験データに含まれ

る Scale effectの取り扱い方について検討したものである。一般に構造設計の基礎データとして材料、部材、構造模型の実験値が用いられるが、実験施設の制約があった実大実験がむずかしく、縮小モデルの実験データがその大半を占める。このうちで鉄筋コンクリート部材の縮小模型実験では試験体の寸法によって強度や破壊性状に幅が生じることが「寸法効果」として知られており、近年、理論的な研究も徐々に進められている。しかし、このような理論を補強・発展させるための系統的な実験が少ない点に注目して、これまで研究室で継続的に実施してきた寸法効果に関するRC梁実験に加えて、本論では最大せい120cmの大型RC梁試験体3体のせん断曲げ実験を行って、研究室に蓄積された過去の実験データと併せて検討し、広い範囲のRC梁縮小模型実験をカバーするせん断強度の推定式を提案した。

実験結果の考察で得られた結果は次の通りである：(1)せん断補強されたRC梁についてもせん断強度の寸法効果が存在する。そして、この寸法効果は主としてアーチ機構の負担分に生じている。しかし、梁せいが60cmを越えると寸法効果は消滅する。(2)本研究で定義した等価強度の概念および実験定数を用いて計算した終局せん断強度は良好な精度で実験値をカバーできた。

---

駿構賞

### モデル・フォロイング制御則を用いた制震機構の開発について

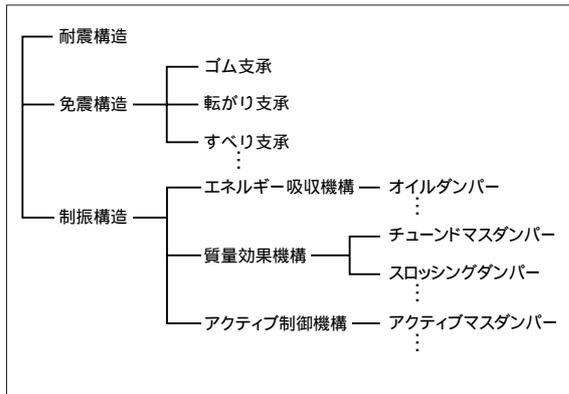
長島和央（オイレ工業）

指導：石丸辰治教授

近年、地震による建築物の被害が数多く報告されており、地震により「建築物が壊れる」という認識が、今まで建築の構造に対して無関心であった人に広まってきている。歴史的建築物や美術館の収蔵品の保存、病院、金融機関や報道の機能維持、集合住宅での被害などについて考えるようになってきている。人命を守り、さらにその後の生活を守ることが、これからの建築物に要求される性能である。

このような性能を建築物に持たせる技術として、免震・制振構造が挙げられる（図参照）。建築物の振動を止めるためには、建築物に入ってきた振動エネルギーを何らかの形で吸収してあげればよい。免震・制振構造は、振動エネルギーを吸収する部材を建築物に付加してあげる構造である。

本修士論文は、制振構造の分野のうち、機械の力を利用して建築物の振動を止める「アクティブ制御」について述べている。その振動エネルギー吸収方法は、建築物



に取り付けた質量を効率よく動かすことでエネルギーを吸収する「マス・ダンパー」方式を採用している。論文の中では、アクティブ制御理論の一つであるモデル・フォロイング制御則を提案し、解析および基礎実験によって理論の有用性を確認している。

#### 桜建賞

### 景観整備事業が住民意識に与える影響に関する研究

長野県小布施町における景観整備事例の分析を通して  
 浅川貴史(日本大学大学院)・浦島靖子(理工学研究所研究生)  
 ・小林英樹(福島県庁)・強谷 隲(寺設計)・柳原 崇(大京)  
 指導：小嶋勝衛教授，根上彰生専任講師，宇於崎勝也助手

これまで多くの地方自治体では、景観整備によるまちづくりの手順としてまず景観整備事業を行い、その後、まちづくりの総合的な計画のなかに位置づけることで、住民の主体的な協定づくりや市民団体の育成を促し、後追いの住民参加を前提としたまちづくりが目標とされてきた。

しかし、平成4年の都市計画法の改正により住民参加の重要性と、より積極的な参加が規定されることとなり、住民も地方自治体でさえも具体的にどのように取り組めばよいかを模索しているのが現状である。

そこで本研究では、地域の個性を活かした住民主体による景観整備を用いたまちづくりの実現を目指して、景観整備をまちづくり方策とした事例のうち長野県上高井郡小布施町を取り上げ、景観整備のなかから町並み修景事業の「建築物、工作物における修景」に着目し、小布施町全3,003世帯の住民の意識・活動面への影響およびその後発生した住民参加の実態を明らかにした。

結果として、住民意識には、景観整備されたことで地域のアイデンティティの形成をもたらし、さらに住民団体が結成されたことで、単なる事業では及びもつかない

地域特性を住民自らが発見し、良好なまちづくりを行うための景観整備が促進されている実態を明らかにした。

#### 桜建賞

### 集合住宅における屋外騒音に対する居住者意識の研究

片山育子(鉄建建設)・福山由美子(大和ハウス工業)  
 ・守谷浩幸(大和ハウス工業)

指導：木村 翔教授，井上勝夫助教授

近年の生活様式の多様化・住民意識の変化などにより、生活の場における快適な環境に対する社会的な要求が高まっている。特に、国道43号線の騒音問題訴訟に代表される道路交通騒音は、日常に最も関係の深い環境問題として早急な対策が必要となっている。しかし、道路交通騒音の問題は、単に騒音対策の観点だけでなく、車社会のあり方など、われわれのライフスタイルにまで踏み込んで考えることが必要であり、生活の利便性・快適性と環境との調和を図ることが必要である。

本研究では、高速道路沿いに建設されている集合住宅団地を対象に、主として高速道路からの騒音に対する居住者の反応を把握するために新たなアンケート調査を行い、さらに団地内全体の騒音測定を実施して、屋外騒音に関する物理量と居住者意識との対応を明らかにすることを試みた。

その結果、居住者の屋外騒音に対する満足度は、屋外騒音レベルが55dBA以下であれば70%以上の居住者が“良い側”の回答をすることが示され、屋外騒音レベルとしては、この55dBA程度が居住者の反応からみた適正レベルといえる。つまり、高速道路沿いのような騒音レベルが55dBAを超える場合は、建物側に防音対策を施し、屋外騒音レベルが55dBAの状態と同等の室内騒音レベルが得られるようにすることが必要である。

#### 桜建賞

### 倍力機構を用いた制振デバイスに関する基礎的研究

帆刈大慈(大成建設)・本間 剛(日建ハウジングシステム)  
 指導：石丸辰治教授，新谷隆弘助手

1995年1月17日の阪神大震災を契機に、地震に対する建物の安全性(対震性)をどのように評価すべきかが議論されてきました。そのなかで、性能のレベルを明示でき、なおかつ技術的にも設計レベルに達していることから、制振構造や免震構造を適用する建物が増えていま



す。われわれはこのような現状を踏まえ、既存の建物にも適用可能で、あらゆる振動（地震動、風揺れ、交通・機械振動など）に対して優れた安全性と居住性を確保するための制振機構（写真）を提案し、それに関する基礎研究を行いました。この機構は“てこ”と“補助質量”を組み合わせ、それを建物に組み込むことで躯体に入力する地震エネルギーを低減できるという理論を具現化したものです。

今回の研究では、提案機構の幾何学的な性質を解析的に把握し、応答解析および振動実験を行うことで機構が理論どおりの性能を発揮するかについて検証しました。早めに着手した割には時間的な余裕がなく忙しい日々でしたが、周囲の協力もあり、当初の目的を上回る研究成果を出すことができました。今後は、実際に建物へ適用した場合を想定して研究を行い、設計レベルにまで研究領域を拡張したいです。

桜建賞

### 長期荷重を受ける RC 基礎梁の変形性状と耐力に関する実験的研究

香田文慶（五洋建設）・遠藤康朗（NTTファシリティーズ）

指導：榎並 昭教授、安達俊夫助教授

低層部と高層部から構成される建築物では、その両者の荷重の違いにより不同沈下が生じる。この沈下は、設計上、即時沈下に属するものとされている。即時沈下といえども、比較的長期間に段階的に荷重が増加する場合、コンクリートのクリープや乾燥収縮等の影響を無視できないと考えられる。また、日本建築学会基礎構造設計指針に示される RC 造の基礎の即時沈下に対する限界変形角の許容値  $\theta_{cr} = (0.5 \sim 1.0) \times 10^{-3} (\text{rad})$  は、圧密沈下に対する許容値から決められたものであり、即時沈下の許容値を裏付ける有力な基礎データがほとんどないの

が現状である。

本研究は、長期荷重を受ける RC 基礎梁の変形性状を実験的に把握することを目的とする。本研究では、梁幅および梁せいを変動因子とした 3 種類の RC 基礎梁模型を用いて短期載荷実験、および建物の建設施工過程を想定した漸増載荷試験を行い、両試験で得られた限界変形角について、学会指針に示される許容値との対応について検討した。その結果、漸増載荷試験は短期載荷試験と比べ、コンクリートのクリープ等の影響により各荷重段階における変形角が大きくなることがわかった。また、両試験による限界変形角は、学会指針に示される限界変形角の許容値のほぼ下限値を示した。

桜建賞

知・活・遊・作

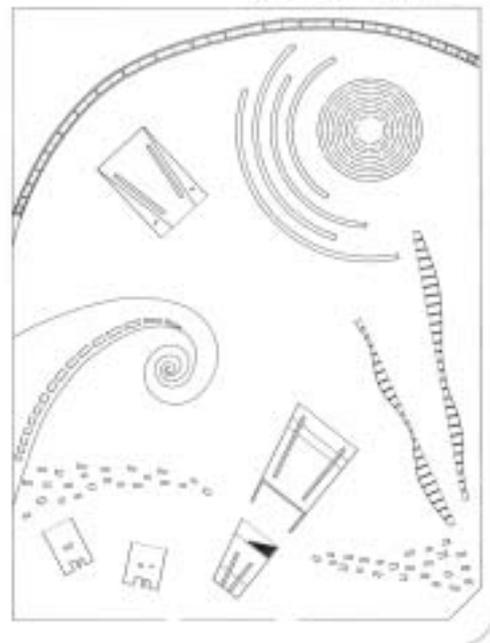
川原塚彩子（丹青社）

指導：関沢勝一助教授、榎並 昭教授

### ・設計主旨

私が今回計画したのは、子供のための芸術創造空間である。このテーマを取り上げたのは、新聞に「図工の時

### 知・活・遊・作・紙



間がなくなる」という見出しを見たからである。

私は小学校の頃、図工の時間が一番楽しみであった。国語や算数のように、先生の話聞いて問題を解くだけの授業に比べ、図工は自分の作りたいものを好きなように作ることができるからである。そんな自己表現の時間がなくなるのは、とても悲しいことであった。そこで、子供達が学校外で自由に創造をできるような空間を提案したいと思ったのである。

私がイメージしたのは、NHK教育番組で放送されていた『できるかな』という番組である。何を作ったらよいかのわからない子供には、のっぼさんやごんたくんのようなプレイヤーが教えてくれる。自分で何かを作りたい子供には、個人では持てないような道具と空間を提供する。

今回計画した芸術創造空間で、子供達が自己を表現できる人間になってほしいと思う。

桜建賞

### 鷹取カトリック教会

震災後のassistenzaとして

土田耕太郎（日本大学大学院）

指導：関沢勝一助教授、片桐正夫教授

#### ・設計主旨

初めて鷹取駅に降りたのは、もう秋の雰囲気を感じられる10月6日だったと記憶している。あの大震災から1年と9ヵ月が経とうとしているその日は、日曜日によく晴れた日だった。駅舎は改修されたばかりなのか、アスファルトの黒さがよく印象に残っている。駅前に出て歩き出すと、そんなに被害は大きくないように思えたが、暮盤目状に計画されたこの地区において、東の空が妙に広く感じられた。鷹取教会に着くと、ちょうどミサの最中で、開け放たれた扉から賛美歌の歌声が漏れていた。そおっと歩み寄り、ミサに最後列ではあるが参加すると、



司祭を囲み、教会の原点である幕屋の雰囲気の中、『ミサ』という名の民の集会が行われていた。それは私にとって初めて経験する光景であり、教会活動の原点を見出した瞬間でもあった。やがて聖体拝領の時間となり、賛美歌の中、私も司祭のもとへご聖体をいただきに行った。その帰りである。司祭に背を向け、信者と向き合った際に、ベトナムから来ている人たちがパイプオルガンのないなか、楽しそうに賛美歌を唄っているのを見て、私は非常に感動したのを覚えている。

この『場・空間』との遭遇が私に大きな希望を与えてくれましたし、被災者の新しい生活を模索する場としての住居と、鷹取教会とを複合させて計画する勇気を与えてくれました。

桜建賞

### Information Market

佐藤 圭（現 理工学部建築学科3年）

指導：小石川正男短大助教授

#### ・設計主旨

現在われわれの環境はマルチメディア社会として、われわれの感覚を遥かに超えた情報処理能力を身につけた。また自由時間の増大、ライフスタイルや趣味の多様化などのなかで「個性」が重要視され、学習の場も拡張しつつある。

私は自己をより向上させる意味として、「学習」から「楽習」へと表現し実践することの意義を求め、情報の街としての秋葉原の駅前に生涯学習の場としての情報発信基地を提案し、Information Marketと称した。



桜建賞

## Potential

子供のための創造空間

花澤弘昌（斉藤建築設計事務所）

指導：小石川正男短大助教授

### ・設計主旨

現代の都市に棲む子供たちの生活を考えたとき、学校は画一的な情報しか子供たちに与えず、学習塾は受験競争に勝ち残るためのテクニックを伝授するのみであり、教育環境は固定化され管理化されているのではないだろうか。子供たちが自分の意志で自由に走り回れるのはもはやコンピューターゲームの画面内であり、しかしその冒険は大人側の用意したプログラムの枠で完結してしまうのである。

本計画は河原と土手を空間化し、河川敷の原風景に子供たちの遊び場（創造空間）を提案し、地域の人々との交流を通じて創造力・自主性・行動力を活性化するための拠点を計画した。



奨励賞

## 液化化発生時の地震動強さに関する有効応力解析

スペクトル強度に基づく解析的検討

丘 将（日総建）

指導：榎並 昭教授，安達俊夫助教授

最近、強震時の観測記録の検討結果をもとに、液化化発生時の地震動強さの評価尺度として、現行の液化化予測に用いられる最大加速度よりも最大速度の方がより合理的であるという指摘がなされている。例えば、翠川・若松は液化化発生時の最大加速度は70～300galに対し、最大速度は10～20kineとばらつきが小さいことを示している。

本研究は表層地盤の液化化発生時の地震動強さの評価尺度に関する解析的検討を目的とする。本研究では、まずスペクトル強度に基づく間隙水圧モデルを提案し、1質点系有効応力解析によるモデルの適用性を確認した。次いで、多質点系有効応力解析への拡張を試み、本解析

法の有効性を確認した。最後に、日本の主要都市地盤モデルについて有効応力解析を行った。その結果、液化化発生時の最大加速度は100～300galに対し、最大速度は10～16kineとなり、観測記録に基づく指摘を解析的に検証できた。

本研究成果を利用すれば簡便に液化化危険度地図を作成することができ、耐震設計を支援する一手法を提案できると考えられる。

奨励賞

## 記憶というイメージ

排除されたものの記憶

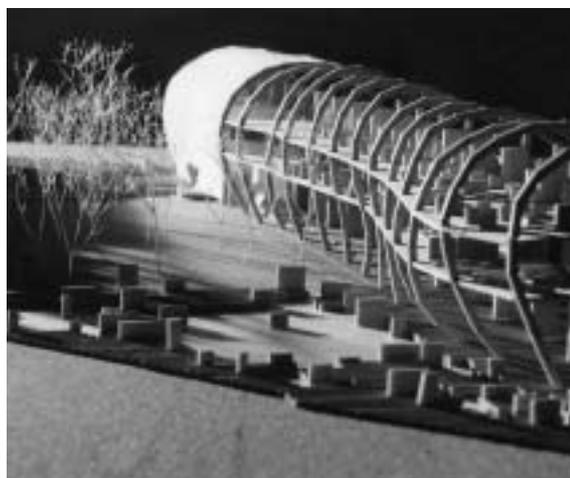
大野博史（日本大学大学院）

指導：若色峰郎教授，横山 清短大教授

### ・6ヵ月間の迷走

今振り返っても、その6ヵ月は奇妙なものだった。それは一次提出に始まり、二次提出、発表へとつながる6ヵ月間の迷走だった。いつも見えていなかったものが見えるようになったり、逆に今まで見えていたものが見えなくなったりする日々の連続で、自分の考えをこれとして決定づけることがなかなかできなかった。そこで得たもののなかには、目先の解答に過ぎないものもあれば、一生を通じて考えていくものもあった。けど、全体を通じてそれらは、僕の建築に対する考え方・態度の基礎になるものであった。だから、これからそれにとりかかると人には、その作品に対して長い目で見ること考えてほしい。そういう態度をとってほしい。そして素晴らしい作品をつくってほしい。年をへても、それが色あせることのないようなものを。

この場を借りて、僕の案を説明しようとは思わない。数百字で全てを語ることはできないし、わかったとして



も誤解を多く含んだものになると思うからだ。もし知りたければ、直接聞きに来てくれるほうがいい。だから、ここでは僕の作品を端的に示す一つのフレーズを書き留めておく。これは発想の段階からあったものではないが、結果として僕の作品の中心的テーマになったものである。

『ずっと以前には、ぼくのなかに何かがあった。だが、いまはもうなくなった。いまはもうない、なくなってしまった。泣いてもむだだし、嘆いてもむだだ。失ったものは二度とよみがえることはないのだ。』

スコット・フィッツジェラルド

#### 奨励賞

### 自由意見に着目した集合住宅居住者の音環境に対する意識に関する研究

梶 裕佳子（西友）

指導：木村 翔教授，莊 美知子非常勤講師

集合住宅における音環境問題は、建築性能とともに、居住者の生活マナーや相隣関係などの要因が関連しており、より良い居住環境の実現を目指して建築側から対処していくためには、居住者の日常生活における経験や問題意識を明確にし、研究の指針として役立つモデルを構築する必要がある。

本研究では、集合住宅居住者の自由意見を個人的経験の記述データとして捉え、機械論的分析として自由連想法、意味論的分析としてKJ法を用いて、集合住宅における音環境に対する居住者意識の流れを明らかにし、これらの分析をもとにパス解析を用いて、居住者の音環境評価がどのようなプロセスによって形成されるか、評価に影響を及ぼす各種要因の因果関係を明らかにして、居住者の意識構造を総括的に捉えることを試みた。

その結果、音環境に影響を及ぼす要因として、「周辺環境騒音」「床の遮音性能」「住まい方の制約」「過去の居住経験」の影響が大きく、これらの要因が集合住宅における音環境を左右している実態が示された。また、「遮音性

能」から「住まい方の制約」さらに「音環境に対する満足度」への意識、「子供の有無」から「加害者意識」さらに「人間関係」への意識の流れが浮き彫りにされた。

#### 企画奨励賞

### 沖縄チャンブル

普天間飛行場跡地利用計画

東 輝（一条工務店）・小林英樹（福島県庁）

・柳原 崇（大京）

指導：小嶋勝衛教授，三橋博巳助教，柳田 武専任講師，石田道孝専任講師，根上彰生専任講師

#### ・企画趣旨

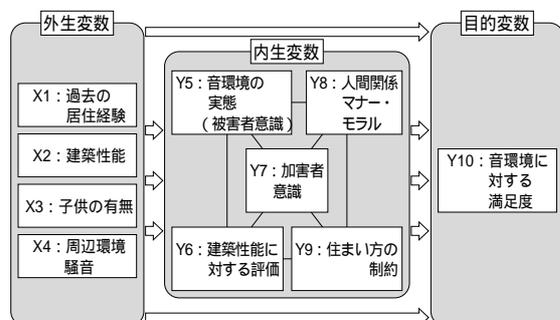
去る1996年4月12日、沖縄の米軍基地である普天間飛行場が全面返還されることが日米間で合意された。沖縄は太平洋戦争の惨禍を経験し、終戦から27年間、アメリカの統治下に置かれ、本土復帰から24年を迎える現在でさえなお、さまざまな問題を抱えている。

そこで、普天間飛行場の返還を通して沖縄の将来像を提案する。

特に、沖縄の持つ固有な特性に着目した上で、〔沖縄チャンブル〕をテーマとして掲げる。チャンブルとは〔混ぜる〕という意味である。本計画ではこのテーマを用いて、沖縄の抱えるさまざまな問題・要素を吟味し、チャンブルする（混ぜ合わせる）ことにより、〔沖縄らしさ〕を創出する。

計画の第一段階とし、地域性を活かした軸や拠点を整備することにより、現在、無秩序に広がっている都市に活力と求心性を持たせる。第二段階では、これらの軸・拠点を関係づけさせる市街地のネットワーク化を図り、沖縄らしいまちづくりを展開する。

こういった一連の流れを通し、さまざまな要素がチャンブルされ、沖縄に新たな関係が生まれる。この軸・拠点・ネットワークといった“しかけ”により〔沖縄チャンブル〕、すなわち沖縄らしい都市が完成する。



不動産科学専攻研究奨励賞

### 小規模開発に対する地方自治体の 規制誘導方策に関する研究

東京都27市の宅地開発等指導要綱の運用実態分析を  
通して

池末宏行（理工学研究所研究生）

指導：小嶋勝衛教授，根上彰生専任講師，宇於崎勝也助手

昭和40年代，急激な宅地開発に伴う人口急増に対し  
て，自治体は宅開要綱を制定し，公共設備整備の促進や  
良好な居住環境の維持を図った。

しかし，近年，宅開要綱が本来前提とした新市街地型  
大規模開発は減少し，既成市街地内の小規模開発が増加  
している。加えて，生産緑地法の改正による市街化区域  
内農地の宅地化などの社会状況の変化のため，今後も小  
規模開発が多数を占めてくると考えられる。

このため，自治体独自の都市政策である宅開要綱の意  
義・役割にも大きな変化が生じており，計画的なまちづ  
くりを行ううえで，小規模開発をどのように規制誘導し  
ていくかが都市計画上の重要な課題となっている。

そこで本研究では，小規模開発の実態調査分析および  
当該事例に携わった自治体の担当者へのアンケート調査  
を通して，規制誘導方策としての宅開要綱の限界を明ら  
かにし，今後，地区的・計画的な指導を行うため，市町  
村マスタープラン等による地区の詳細な将来計画の提示  
の必要性と，宅開要綱の手続面をまちづくり条例等で位  
置づけ，一般的な指導項目について条例化を行い，指導  
の公平性の確保・不透明性の是正および実効性の強化を  
図ることの重要性を指摘するに至った。

不動産科学専攻研究奨励賞

### 都市沿岸域における開発と漁業との調整の あり方に関する研究

中村智広（安土興産）

指導：横内憲久教授，桜井慎一専任講師

わが国の地形的特性から，沿岸域は国土政策上きわめ  
て重要な地域であり，特に都市沿岸域には多様な利用ニ  
ーズによる高いレベルのコンフリクトが生起している。

こうした沿岸域の利用調整は，究極的には沿岸域総合利  
用計画制度による解決をみるものであるが，漁業権，漁  
業補償など漁業との利用調整は，その中心的課題となっ  
ている。

本研究では，まず，開発，漁業および環境保全の共存を  
促進するためには，現行の事前一括の漁業補償制度には一  
定の限界があることを確認した上で，今後の漁業補償のあ  
り方として，実際に発生した漁業上の損害を事後的に把握  
し補償する事後補償制度が有効であることを指摘し，具体  
的には漁業補償ファンドを提案している。次に，漁業を取  
り巻く環境が変化するなかで，現行漁業権が開発推進の阻  
害要因となっているばかりでなく，例えば，つくり育てる  
漁業など，新たな漁業形態の促進に対しても不十分である  
ことを指摘し，漁業権のあり方として，漁業権を量的（設  
権範囲）に減少させつつも，権利内容を質的に拡充するこ  
とが必要であることを提案している。

日本環境管理学会賞

### 景観整備の波及効果に関する研究

長野県小布施町における拠点整備の事例分析を通して

川島和彦（日本大学大学院）

指導：小嶋勝衛教授，根上彰生専任講師，宇於崎勝也助手

拠点的に実施する景観整備事業は，その整備に終わっ  
てしまうのではなく，それを契機とした住民による自然  
発生的な面的広がりを期待し，実態として存在する波及  
効果を計画的に誘導していく必要がある。

本研究は，近年全国的に展開されている景観整備事業  
をまちづくりの方策として実施している事例において，  
景観整備事業による波及効果の分析および住民意識の分  
析を通して，景観整備事業を用いた良好なまちづくりへ  
向けた誘導手法を見出すことを目的としている。そこで，  
長野県小布施町を対象として，自治会単位へのヒアリン  
グ調査および住民を対象とした悉皆アンケート調査とそ  
の分析を行うことにより，住民意識に及ぼした影響を把  
握し，そのうえで波及効果の指標を先行事業による建築  
物の「修景」に定め，ヒアリング調査や実態調査により  
その実態分析および要因の分析を経年的に行った。結論  
として，景観整備事業をきっかけとするまちづくりへ向  
けた誘導手法に関する具体的な提案を行っている。

### 1997 建築学会大会案内

9月13～15日に日本建築学会大会が船橋キ  
ャンパスを主会場にして開催される。全国から  
延べ8,000名に近い建築関係者が集う年に一度  
の大イベントである。

大会ホームページ：http://www.ajj97.cst.nihon-u.ac.jp

#### 主なイベント

- 大会記念講演会 「大自然を旅して/今井通子」9月3日(水)18:30～ 千葉ステーションビル 「In Our Nature 人と自然との共生 / C.W.Nicol」9月12日(金)18:30～ 船橋市民文化ホール
- 特別企画 [1]建築・環境と子供たち 未来への架け橋（ワークショップ：やってみよう まちづくり）。展示：親と子の都市と建築講座。フォーラム：わくわく交流会，[2]技術と建築 建築技術模型展，[3]情報技術とCAAD教育の現場展，および公開シンポジウム「まちづくりと海」，総合研究協議会「阪神・淡路大震災から得た教訓と今後の課題」等が大会期間中，船橋キャンパスで行われる。

# 平成9年度 建築学科・短大建築コース オリエンテーション報告

## 建築学科

### 建築をみる

6月20日(金), 6月には珍しい台風が関東地方を直撃, 午後の授業は休講措置がとられた。明けて21日(土), 台風一過。バス3コース, 現地集合10コースは, それぞれが特徴を持って実施された。

オリエンテーションは, 建築環境に早くなじむようにとの1年生参加が実行され, 例年の2年生参加型との統合により, 総勢620名弱による計画の立案が要求された。1年生参加は昨年からの懸案事項であり, 2年生との合同は実際の建物をじっくり見て説明を受けるには余りにも人数が多く, 危惧する意見もなくはなかった。

そのため, バスは40名, 現地集合は15~30名を1単位としてコースを構成した。1年生は1年生のみでコースを編成, 6月18日(水)に見学地の東京ビックサイトは榎佐藤総合計画常務取締役細田雅春氏, 葛西臨海水族館は高宮真介教授によ

## 主要コースなど

コース	参加申込者	主要コース	担当
A	40(2)	東武ワールドスクエア	斎藤, 岡田
B	32(21)	サレジオ学園 江戸東京たてもの園	片桐, 大川, 重枝
D	37(18)	横浜地区センター巡り	本杉, 佐藤(慎), 栗原, 野内
E	30	千葉市立打瀬小学校 幕張地区集合住宅	若色, 関口, 渡辺
F	30	日の出桟橋 水上バス 葛西臨海水族館	本岡, 清水
G	30	フジテレビ 臨海副都心 東京フォーラム	木村, 井上
H	15(11)	浅草 下町再開発見学 江戸東京博物館	小嶋, 浅香, 根上, 宇於崎
I	30	横浜美術館 MM21	白井, 森泉
J	15	竹芝桟橋 東京湾クルージング	関沢, 佐藤(直)
K	8	サンステート勝どき橋 江戸東京博物館	石丸, 安達, 新谷, 山田
L	32	東京オペラシティ NTT-ICC	平山, 三橋, 柳田
M	22(9)	墨田トリフォニーホール YKK・R&D	吉田, 宇杉, 八藤後
N	222	東京ビックサイト 葛西臨海公園	半貫, 岡村, 斎藤, 橋本, 蜂巣
計	543(61)		

\*バスコース A~D, 現地集合・現地解散コース E~N

\*参加申込者欄( )内は1年生で内数

\*1年生に対して, 見学に関する説明会を6月18日(水)開催。担当: 高宮, 岡村, 橋本  
在籍者数 1年 283名, 2年 303名, 3年編入 33名

る建物についての説明会を企画・実行した。

学生諸君にとって今一番必要なものは, 教員とのコミュニケーションである。参加した488名の学生たちが得たものは, 「触れあい」と「いくつかの視点からものを見ること」

であり, これは建築を学ぶうえで貴重な財産となる。

先生方が企画した特色あるコースに, 参加の意思さえ示さなかった学生は, 実際の建物を見ることの大切さを学びとった3・4年生や大学院学生からの「私たちも参加できない





か」という積極的な声をどう聞か、不参加の行動を自分の問題として捉え、建築を学ぶことの意義を考え直してほしい。参加自由であるからこそ、主体性が問われる。身近な友は

皆ライバル、建築家として求められることは、一緒にめざすのではなく、自らの攻めの姿勢と判断する目、個性を磨くことではないだろうか。

( 学生生活委員 岡村武士 )

## 短大建築コース

平成9年度の短期大学部建設学科建築コースの新入生は、昨年度より若干多い108名であった。これら新入生との親睦を図るために、恒例のオリエンテーションを去る4月30日(水)に実施した。

当日は、午後1時に津田沼駅近くのポーリング場に集合し、ポーリング大会を行い、その後、船橋キャンパスに戻り、夕刻からキャンパス内のファラデーホールを借り切り懇親コンパを行った。

ポーリング大会では賞品も用意したため、入学間もない新入生も知らず知らずのうちに熱が入り、授業に

追われる忙しい日々から解放されて、元気はつらつとプレイに興じていた。夕刻からの懇親コンパは、横山教室主任の乾杯、ポーリング大会の表彰に始まったが、ビールの酔いにも後押しされて、和気あいの雰囲気の中、瞬く間に予定の時間が過ぎ、実のある懇親の一日を終えた。

( 中山 優, 岡田 満 )

荘美知子非常勤講師、木村翔教授、鈴木久恵氏、梶裕佳子氏連名の原著論文「集合住宅の住環境全般と音環境に対する居住者評価の分析」が、日本建築学会計画系論文集No.493(1997.3)に掲載された。

石上忍氏、池永博威氏、清水五郎助教授、佐久田昌昭海洋建築工学科教授連名の原著論文「外壁材料のよごれの評価に及ぼす材料の模様の影響」が、日本建築学会構造系論文集No.395(1997.5)に掲載された。

小嶋勝衛教授、根上彰生助教授、宇於崎勝也助手、生田目裕氏連名の原著論文「東京圏における定期借地権設定住宅地の性状と借地権価格の傾向に関する調査研究」が、日本建築学会計画系論文集No.395(1997.5)に掲載された。

清水建設の中川清氏と関口克明教授連名の原著論文「ステージ形態のオーケストラ演奏に対する演奏効果」が、日本建築学会技術報告集第4号(1997建築雑誌増刊, Vol.112, No.1404)に掲載された。

木村翔教授、井上勝夫助教授、尾崎充男氏連名の原著論文「鉄骨ALC系住宅における重量床衝撃音遮断性能の改善方法に関する研究」が、日本建築学会計画系論文集No.496(1997.6)に掲載された。

## 教室ぶろむなーど

小嶋勝衛教授、根上彰生助教授、宇於崎勝也助手、広井義政氏、鈴木圭一氏連名の原著論文「都心居住者の土地活用事業選択とその要因に関する研究 東京都心部のモデル地区の分析を通して」が、日本建築学会計画系論文集No.496(1997.6)に掲載された。

浅利隆文氏、小嶋勝衛教授、根上彰生助教授、宇於崎勝也助手連名の原著論文「基礎的地価形成要因から分析した東京23区の地域構造」が、日本建築学会計画系論文集No.496(1997.6)に掲載された。

宇杉和夫専任講師の著書「日本住宅の空間学・ウラとオモテ ウチとソトのスペースオロジー」が1997年5月に理工図書から刊行された。宇杉哲学の難しい本かと思ったらそうでもなく、建築の学生なら十分読める内容である(編集委員の独言)。発想のユニークさと対象の切り口に著者のオリジナリティが感ぜられる力作。学生諸君のほか一般の人にも読んでもらうことを希望して書かれたもの。講義のテ

キストにもなる予定とのこと。

大川三雄助手と川向正人氏、初田亨氏、吉田綱市氏連名の著書「図説 近代建築の系譜 日本と西欧の空間表現を読む」が1997年6月30日に榊園国社から刊行された。全体が2部構成で、Part 1は「日本の近代建築を読む」、Part 2が「西欧の近代建築を読む」、大川助手はPart 1の主要部を担当している。一般向けの視点も意識した(これは編集委員の勝手な解釈)たいへん読みやすい構成の本である。しっかりした近代建築史年表と索引があって資料集としても便利そう。あとがきに「建築の現在を理解するために」とあって、ここから先に読むほうがよいかもかもしれない。

岸谷孝一教授の突然の逝去からはや1年。建築教室の木村翔教授、平山善吉教授、東京大学建築学科材料研究室の先生方等が発起人となって、一周忌にあわせて「岸谷孝一先生を偲ぶ会」が催された。6月23日午後6時、建築会館ホールに入りきれないほどの人々が集い、岸谷先生の遺徳を偲んだ。

消息筋の信頼できる情報によると、昨年7月×日、野村勲教授の媒酌で結婚されること。なにはともあれ、おめでと。

### 駿建目次

(1997.7 Vol.25 No.2 通巻98号)

座談会：建築設計教育の目指すもの	2	平成8年度各賞受賞論文・作品概要紹介	10
追悼 加藤 渉先生	6	平成9年度建築学科・短大建築コース	
中国と日本の合作本の出版	7	オリエンテーション報告	19
私と作品	8	教室ぶろむなーど	20

『駿建』 発行者・木村 翔：千代田区神田駿河台1-8 日本大学理工学部建築学科教室 Tel.03(3259)0724

http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp 印刷：奥村印刷株式会社



か」という積極的な声をどう聞か、不参加の行動を自分の問題として捉え、建築を学ぶことの意義を考え直してほしい。参加自由であるからこそ、主体性が問われる。身近な友は

皆ライバル、建築家として求められることは、一緒にめざすのではなく、自らの攻めの姿勢と判断する目、個性を磨くことではないだろうか。

(学生生活委員 岡村武士)

## 短大建築コース

平成9年度の短期大学部建設学科建築コースの新入生は、昨年度より若干多い108名であった。これら新入生との親睦を図るために、恒例のオリエンテーションを去る4月30日(水)に実施した。

当日は、午後1時に津田沼駅近くのポーリング場に集まり、ポーリング大会を行い、その後、船橋キャンパスに戻り、夕刻からキャンパス内のファラデーホールを借り切り懇親コンパを行った。

ポーリング大会では賞品も用意したため、入学間もない新入生も知らず知らずのうちに熱が入り、授業に

追われる忙しい日々から解放されて、元気はつらつとプレイに興じていた。夕刻からの懇親コンパは、横山教室主任の乾杯、ポーリング大会の表彰に始まったが、ビールの酔いにも後押しされて、和気あいの雰囲気の中、瞬く間に予定の時間が過ぎ、実のある懇親の一日を終えた。

(中山 優, 岡田 満)

荘美知子非常勤講師、木村翔教授、鈴木久恵氏、梶裕佳子氏連名の原著論文「集合住宅の住環境全般と音環境に対する居住者評価の分析」が、日本建築学会計画系論文集No.493(1997.3)に掲載された。

石上忍氏、池永博威氏、清水五郎助教授、佐久田昌昭海洋建築工学科教授連名の原著論文「外壁材料のよごれの評価に及ぼす材料の模様の影響」が、日本建築学会構造系論文集No.395(1997.5)に掲載された。

小嶋勝衛教授、根上彰生助教授、宇於崎勝也助手、生田目裕氏連名の原著論文「東京圏における定期借地権設定住宅地の性状と借地権価格の傾向に関する調査研究」が、日本建築学会計画系論文集No.395(1997.5)に掲載された。

清水建設の中川清氏と関口克明教授連名の原著論文「ステージ形態のオーケストラ演奏に対する演奏効果」が、日本建築学会技術報告集第4号(1997建築雑誌増刊, Vol.112, No.1404)に掲載された。

木村翔教授、井上勝夫助教授、尾崎充男氏連名の原著論文「鉄骨ALC系住宅における重量床衝撃音遮断性能の改善方法に関する研究」が、日本建築学会計画系論文集No.496(1997.6)に掲載された。

## 教室ぶろむなーど

小嶋勝衛教授、根上彰生助教授、宇於崎勝也助手、広井義政氏、鈴木圭一氏連名の原著論文「都心居住者の土地活用事業選択とその要因に関する研究 東京都心部のモデル地区の分析を通して」が、日本建築学会計画系論文集No.496(1997.6)に掲載された。

浅利隆文氏、小嶋勝衛教授、根上彰生助教授、宇於崎勝也助手連名の原著論文「基礎的地価形成要因から分析した東京23区の地域構造」が、日本建築学会計画系論文集No.496(1997.6)に掲載された。

宇杉和夫専任講師の著書「日本住宅の空間学・ウラとオモテ ウチとソトのスペースオロジー」が1997年5月に理工図書から刊行された。宇杉哲学の難しい本かと思ったらそうでもなく、建築の学生なら十分読める内容である(編集委員の独言)。発想のユニークさと対象の切り口に著者のオリジナリティが感ぜられる力作。学生諸君のほか一般の人にも読んでもらうことを希望して書かれたもの。講義のテ

キストにもなる予定とのこと。

大川三雄助手と川向正人氏、初田亨氏、吉田綱市氏連名の著書「図説 近代建築の系譜 日本と西欧の空間表現を読む」が1997年6月30日に榊園国社から刊行された。全体が2部構成で、Part 1は「日本の近代建築を読む」、Part 2が「西欧の近代建築を読む」、大川助手はPart 1の主要部を担当している。一般向けの視点も意識した(これは編集委員の勝手な解釈)たいへん読みやすい構成の本である。しっかりした近代建築史年表と索引があって資料集としても便利そう。あとがきに「建築の現在を理解するために」とあって、ここから先に読むほうがよいかもかもしれない。

岸谷孝一教授の突然の逝去からはや1年。建築教室の木村翔教授、平山善吉教授、東京大学建築学科材料研究室の先生方等が発起人となって、一周忌にあわせて「岸谷孝一先生を偲ぶ会」が催された。6月23日午後6時、建築会館ホールに入りきれないほどの人々が集い、岸谷先生の遺徳を偲んだ。

消息筋の信頼できる情報によると、昨年7月×日、野村勲教授の媒酌で結婚されること。なにはともあれ、おめでと。

### 駿建目次

(1997.7 Vol.25 No.2 通巻98号)

座談会：建築設計教育の目指すもの	2	平成8年度各賞受賞論文・作品概要紹介	10
追悼 加藤 渉先生	6	平成9年度建築学科・短大建築コース	
中国と日本の合作本の出版	7	オリエンテーション報告	19
私と作品	8	教室ぶろむなーど	20

『駿建』 発行者・木村 翔：千代田区神田駿河台1-8 日本大学理工学部建築学科教室 Tel.03(3259)0724

http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp 印刷：奥村印刷株式会社